

40 馬王堆『南方禹臧』図考

猪飼祥夫

中国湖南省長沙市の郊外の馬王堆で出土した二千年前の『南方禹臧』図は、子供たちの健康と幸福を願う一つの呪法である。長い間呪法は医学の重要な一部門だった。この『南方禹臧』図は出産後の胎盤、則ち胞衣の埋め方によつてその子の将来の幸福と運命を測ろうと願うものである。

『南方禹臧』図は絹の帛に描かれていた。この帛書は医学関係の考古学的報告書『馬王堆漢墓帛書（肆）』の『胎産書』という文献に含まれている。『胎産書』には他に『人字』とよばれている呪法の図と産科学にかかわる文献が含まれている。

『南方禹臧』図の南方とは、図の中の方位をあらわすというのが注釈者の解釈である。禹は古代の伝説の皇帝禹

を指す。工藤元男は禹の性格を「嫁娶日の吉凶にかかわる禹、治療者の神としての禹、アジールの神としての禹、行神としての禹」として取り上げている。この図の禹はアジール（不可侵の聖域）を持つ神として現れているのは、大地を不浄の胞衣で汚すことを好まない理由によるものと思われる。禹臧の臧とは蔵である。蔵とは胞衣をおさめるということである。当然、胞衣は大地を汚すことがないように洗われて、かわらけの壺に納められて埋められる。

同時に出土した『雜療方』に『禹臧（臧）狸（埋）包（胞）圖法』という文献がある。この文献が『南方禹臧』図を用いる方法を述べている。「胞衣を埋蔵するときには、小時と大時の所在を避け、出産した月の（図を見て）、数字が多いところを見て胞衣を埋める」とある。小時とは月建を指し、大時とは咸池を指し、太歳の神のいる方向を示している。すなわちそれぞれの月の凶の方向には胞衣を埋めないで、寿命が多い方向を選ぶ呪法である。この呪法の方向を決める図の中心についてはわからない。

杉立義一によれば馬王堆の『胎産書』の文献は徳貞常

の『産経』を通じて『医心方』に伝来されたという。この『南方禹臧』図に当たるものは、『医心方』には見当たらない。しかし伝来していたことだけは確かである。

『医心方』巻二十三の「産婦尚坐地法」に、この図が「十二月神図」と呼ばれ、出産するときに向かつて坐る方向を示す図だとされているからである。「産経に言っている。考えてみるに、産家の婦人の向坐の法というのは図が有ると言っても、図の多くは欠けているところが多く、用いるのにはつきりしなく、疑問を生じるところが多い。そこで今その実際のところを選びとって、十二月図の中に載せる。すべて用いるところが明らかになりわかりやすい。……」

この図がどんなものであったかは、その後の文章に図中に天一日遊八神の諸神が載っていたとあるから、図中に神の位置を示した図であったらしい。

唐の『外台秘要』巻三十三には「十二月立成法」として同様の図を引いている。さらに宋の『太平聖恵方』巻七十六にも「十二月産図」として引かれている。『外台秘要』ではこの図は産屋の産帳を張る位置を示す図と考え

られている。また『婦人大全良方』巻十六には「遂月安産藏衣忌向方位」としてこの産図が安産のために貼るおまじないの図となり、その方向に懸けておく位置を示すものとなっている。

このような混乱は、馬王堆の『南方禹臧』図から後世に伝来する間に大きく変化して、本来の意味がわからなくなつたことによるのであろう。すでに六朝時代に『産経』が編纂されたときにさえ混乱があつたと述べていることから、早い時期にこの図の正しい意味がわからなくなつていたと考えられる。

(滋賀県大津市)